

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K13907

研究課題名（和文）＜百年カンボン＞における土地供給とコミュニティの持続性に関する研究

研究課題名（英文）Study of land supply and continuity of community in "100-year kampungs"

研究代表者

林 憲吾（Hayashi, Kengo）

東京大学・生産技術研究所・准教授

研究者番号：60548288

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：メガシティ・ジャカルタの住宅地の過半を占めるカンボンの、さらにその半数がオランダ植民地期から存続する歴史的カンボン（＜百年カンボン＞と呼称）だという申請者の研究成果を基に、＜百年カンボン＞が、植民地期からの空間的連続性のみならずブタウィ人コミュニティの継続性を有することを明らかにした。また、土地供給プロセスに関して、親族間の土地譲渡では非正規の土地権を維持するが、外部流入者には正規の土地権へ転換して売却するなど戦略的な土地譲渡の傾向が確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来のカンボン研究が相互扶助による住宅建設や増改築など戦後の人口流入に対する住民の共助的適応に関心を寄せてきた一方で、植民地期からのコミュニティの継続性など、これまでほとんど顧みてこなかったカンボンの歴史的価値を本研究は提示できた。成熟期に入ったジャカルタで歴史性を活かしたまちづくりや都市計画を進めるための契機となるだろう。また、カンボンはインフォーマル居住地として認識されているが、スクオッターではなく、正規/非正規の土地権の使い分けが居住のセーフティネットを形成する上で重要な働きをする示唆を得た。

研究成果の概要（英文）：Based on my research findings that half of the residential kampungs in Jakarta, the largest megacity in Southeast Asia, are historic kampungs that have existed since the Dutch colonial period or "kampung satu abad", it was found that the historic kampungs have continuity of the Betawi community as well as spatial continuity from the colonial period. In addition, a strategic land transfer trend was identified in the land supply process by the residents, such as maintaining informal land rights in land transfers between relatives while converting them into formal land rights and selling them to outside migrants.

研究分野：建築・都市史

キーワード：カンボン 土地権 ブタウィ コミュニティ ジャカルタ メガシティ

1. 研究開始当初の背景

インフラ整備や正規の住宅供給が遅れた途上国にあって、肥大化する都市人口の定住を可能にしたのはインフォーマル居住地である。人口減少社会に入り近代都市計画の綻びが現れはじめた日本や欧米では、都市計画分野を中心に、そうした途上国のインフォーマル居住地の原理を住民主体の都市化として注目している(城所ら 2015)。

東南アジア最大の人口を抱えるインドネシア・ジャカルタもまた、インフォーマル居住地が数多く存在する。カンボンと呼ばれる自然発生的に形成された居住地がそれにあたり、現行法に従って登記がなされていない土地が数多く存在するとされる(Tunas et al. 2010)。カンボンの拡大は、1949年の完全独立以降の人口流入が要因となったため、戦後に新たに形成された居住地として見なされやすいが、研究代表者はこれまでの研究において、現存するカンボンの半数以上が少なくとも20世紀前半の植民地期から存在したことを明らかにした(図1)。つまりこれは植民地期の土着のコミュニティを基盤として独立後の人口吸収が生じた可能性を示す。したがって、少なくともインドネシアにおいてはインフォーマル居住地の形成原理は植民地期の都市構造やコミュニティの連続性において理解されるべきであり、都市史の視点からのインフォーマル居住地形成過程の解明が必要と考えた。



図1. ジャカルタ全域の<百年カンボン>の分布(下)。上は1930年代のカンボンの分布

2. 研究の目的

以上を背景に、本研究が設定した核心となる問いは、独立後のカンボンの拡大は、スクォッターという移住者の一方的な占拠ではなく、植民地期の土地制度を下敷きにした土着のコミュニティ(主にブタウィ人コミュニティ)の土地供給が可能にしたのではないかと、さらにそのプロセスは、既存コミュニティの流出を招いたのではなく、持続を伴ったのではないかと、というものである。本研究は、植民地期から存続するカンボンをも「百年カンボン」と定義し、①植民地期のブタウィ人コミュニティが、戦後の人口流入の過程にあっても解体してしまわずに、現在まで存続していることを、ジャカルタ全体の定量分析とケーススタディを組み合わせ検証し、②「百年カンボン」においてどのようなプロセスと土地権、土地の譲渡や分筆がおこなわれたのかを特定地区のフィールド調査をとおして明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

都市レベルの定量的なカンボンの動態分析と、特定地区での住民へのインタビューなどのフィールド調査を通じた土地分割や契約内容に関する分析との、二つの手法を組み合わせる。都市レベルの分析では、研究代表者が作成したジャカルタ首都特別州全域でのカンボンの分布データに加え、取得済みの統計データや衛星画像などを利用することで、「百年カンボン」のコミュニティの特性を定量的に分析する。フィールド対象地はその結果を用いて選定する。なお、土地権については国土庁(Badan Pertanahan Nasional)が公開する土地権の現況図を基礎資料とする。

4. 研究成果

(1) 「百年カンボン」における植民地期のブタウィ人コミュニティの連続性

研究代表者がこれまでに作成したジャカルタ全域の居住環境の類型別分布図(250mメッシュ単位)に、2000年の人口センサスの民族データをメッシュ単位に変換したデータを統合して、「百年カンボン」のブタウィ人割合を算出した。その結果、植民地期に何らかの集落があったと推定される「百年カンボン」では、戦後に新たに形成されたカンボンよりも、現況のブタウィ人割合が高い傾向にあることが明らかとなった(図2)。戦後の人口流入は中・東部ジャワなど主にジャカルタの外からの移住者によって形成されたため、現況のブタウィ人の割合の高さは、戦後の人口流入以前のコミュニティの存在を示唆している。また、統計と実態の乖離が懸念されるため、これらのデータを基に、複数の「百年カンボン」でフィールド調査をおこなったところ、植民地期からのブタウィ人家族の継続やブタウィ人の伝統木造家屋であるブタウィハウス(Nas et al. 2008)の現存が確認される場所が多く、分析結果の妥当性が示された。

従来のカンボン研究は相互扶助による住宅建設や増改築など戦後の人口流入に対する住民の共助的適応に関心を寄せてきた一方で、植民地期からのコミュニティの継続性といったカンボンの歴史的価値についてはほとんど顧みてこなかった。そのため、現存するカンボンの半数が長

期の歴史性を持ち合わせているという視点は、国際会議の発表においてインドネシアの行政や学術界からの参加者に非常に注目された。成熟期に入ったジャカルタで歴史性を活かしたまちづくりや都市計画を進めるための契機になるように引き続き成果発信に努めていきたい。

(2) ラワベロン地区における土地分割プロセスの復元

<百年カンボン>における土地譲渡プロセスの歴史を復元するために、西ジャカルタ市・北スカブミ区・ラワベロン地区においてフィールド調査を実施した。この地区は植民地期より花卉生産地として有名であり、現在でも東南アジアでも随一の花弁市場が存在する。また、ブタウィハウスが2棟現存しており、植民地期のブタウィ人コミュニティの継続が確認されたことから当該地域を調査地に選定した。

UAVを用いた居住地全域の航空写真の撮影と、画像解析ソフトによる調査用地図の作成をおこなって現在の敷地割を特定し、さらに各世帯に対して、①土地所有の形態、②居住の経緯についてインタビュー調査をおこない、長老や自治会長らへのインタビュー調査もあわせて実施した。その結果、植民地期から当該地区に居住する複数のブタウィ世帯を特定し、彼らの敷地が親族あるいは新規流入者に分割・供給されていく過程を部分的に復元できた(図3)。また、70年代に当該地区で実施されたカンボン改善計画(KIP)を通じた主要道路のアスファルト化が、人口流入の一つの契機であった点、都心部の開発で移住を余儀なくされた人々の受け皿に当該地区がなっていた点が明らかとなった。従来指摘されていたジャカルタ外からの人口流入の受け皿という点以外に、都心のジェントリフィケーションのバッファとしてジャカルタ内人口移動の受け皿になっていたことを提示した。

(3) ラワベロン地区における土地譲渡と土地権の関係

土地分割プロセスの分析では、土地の譲渡がどのような土地権利の下、実施されたかをあわせて分析した。その結果、地元のブタウィ人世帯が遺産相続を子世代に対しておこない、同一敷地内に血縁者が近接して住戸を建設しながら住戸密度を増やすケースが相当数存在していることがわかった。国土庁が公開する土地権の地図と照合すると、未登記の土地はそれらブタウィ人家族が居住する敷地と高い確率で一致し、不法占拠ももちろん存在するが、血縁者間で土地相続をおこなった箇所であるケースが数多いことが判明した。

第二に、新規流入者との土地交換では、1990年代後半以降は正規の土地権利の下に売買をおこなうケースが一般的であった。それ以前は、売買証書のみや、オランダ時代に発行された土地権利書、コミュニティによる慣習的私有権などで、公的な登記なしに土地売買をおこなっているケースが大半であったが、ただしそれらも1996年の政府の土地権利正規化プログラムの結果、現在はほとんど土地登記されていた。

カンボンはインフォーマル居住地として認識され、従来は土地のインフォーマル性が強調されて慣習的土地譲渡が高密度化を支えたと結論づけがちであったのに対して、正規/非正規の土地権の使い分けが居住のセーフティネットを形成する上で重要な働きをする示唆を得た。この点についてはインドネシア大学が主催する国際会議 iDwell conference で発表した。上記(2)、(3)の成果は、原著論文として発表予定である。

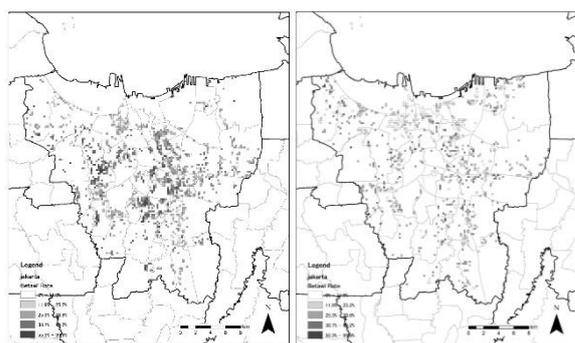


図2. <百年カンボン>のブタウィ人口割合(左)。1930年代以降に新規形成されたカンボンのブタウィ人口割合(右)

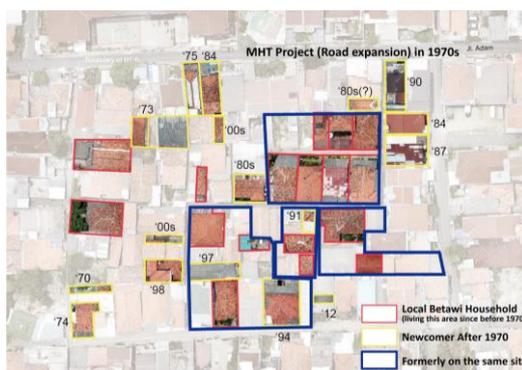


図3. ラワベロン地区のブタウィ人世帯の土地と新規流入層の土地

<引用文献>

- 城所哲夫他(編著)(2015)『アジア・アフリカの都市コミュニティ』学芸出版社
- Peter J. M. Nas, Yasmine Z. Shahab, and Jan J. J. M. Wuisman (2008) The Betawi house in Jakarta: The dynamics of an urban cultural tradition. R. Schefold and Peter J. M. Nas (eds.) *Indonesian Houses Vol. 2*. pp. 597-628.
- Tunas, D. et al. The self-help housing in Indonesia: The only option for the poor? *Habitat International*. (34), pp. 315-322, 2010

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 林憲吾 | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 住空間（東南アジア） | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 イスラーム文化事典 | 6. 最初と最後の頁 100-101 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 林憲吾 | 4. 巻 60(2) |
| 2. 論文標題 書評 布野修司『スラバヤ 東南アジア都市の起源・形成・変容・転成 - コスモスとしてのカンボン』 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 東南アジア研究 | 6. 最初と最後の頁 255-258 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 林憲吾 | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 近代のニルヴァーナ 書評：Lawrence Chua, Bangkok Utopia: Modern Architecture and Buddhist Felicities, 1910-1973. | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 建築討論 | 6. 最初と最後の頁 - |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 林憲吾 | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 mASEANaプロジェクト | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 2022年度日本建築学会大会（北海道）建築教育部門パネルディスカッション資料 近現代建築プロジェクトがもたらしたアウトリーチとその課題 | 6. 最初と最後の頁 42-45 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 林憲吾・村松伸・土谷貞雄 | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 キッチン空間史 - 貯蔵・調理・加工・片づけが食文化を変える | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 フォーラム 人間の食 第1巻 食の文明論 ホモ・サピエンス史から探る | 6. 最初と最後の頁 235-264 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|------------------|
| 1. 著者名 林憲吾・大塚光太郎 | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 複数のモダンムーブメント年表：東南アジア | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 オリガミアーキテクチャー：一枚の紙から世界の近現代建築を折る | 6. 最初と最後の頁 29 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 HAYASHI Kengo | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 40 Years of the Modern Asian Architectural Heritage Database: Its Development, Transformation, and Challenges. | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 JCIC-Heritage 's 29th Seminar: Preservation and inheritance of information related to cultural heritage | 6. 最初と最後の頁 19-26 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 林憲吾 | 4. 巻 4 |
| 2. 論文標題 なぜ私はインドネシアに行ったのか - 高床式住宅との邂逅 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 Environmental Design Global Hub Annual Report | 6. 最初と最後の頁 24-25 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 Hayashi Kengo, Mimura Yutaka, Abe Ryosuke | 4. 巻 Springer |
| 2. 論文標題 Diversity and Historical Continuity of the Residential Landscape of a Megacity: A Case Study on the Jakarta Metropolitan Area | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 Living in the Megacity: Towards Sustainable Urban Environments. Global Environmental Studies. | 6. 最初と最後の頁 45 ~ 65 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/978-4-431-56901-5_4 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名 Uchiyama Yuta, Hayashi Kengo | 4. 巻 Springer |
| 2. 論文標題 Generation of Urban Morphologies Through Long-Term Evolution of Socio-Ecological Urban Systems: Regional Characteristics and Sustainable Management of Megacities | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 Living in the Megacity: Towards Sustainable Urban Environments. Global Environmental Studies. | 6. 最初と最後の頁 105 ~ 125 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/978-4-431-56901-5_6 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 林憲吾 | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 水際のレジリエンス | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 医療百論2020 | 6. 最初と最後の頁 207-211 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 8件 / うち国際学会 4件）

| |
|-------------------------------|
| 1. 発表者名 林憲吾 |
| 2. 発表標題 アジア近現代建築データベース |
| 3. 学会等名 日本建築学会大会（近畿）（招待講演） |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 林憲吾 |
| 2. 発表標題 mASEANaプロジェクト |
| 3. 学会等名 2022年度日本建築学会大会（北海道）建築教育部門パネルディスカッション |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---------------------------------|
| 1. 発表者名 林憲吾 |
| 2. 発表標題 アジア近代建築 - 南からの近代 |
| 3. 学会等名 世界建築史15講連続セミナー（招待講演） |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 林憲吾・田窪淑子 |
| 2. 発表標題 歴史と地球惑星科学の融合による新たな風土論は可能か？ - 建築・都市の観点から - |
| 3. 学会等名 Japan Geoscience Union Meeting 2022（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|-------------------------------------|
| 1. 発表者名 林憲吾 |
| 2. 発表標題 PODESデータから考えるアトラス |
| 3. 学会等名 『ジャカルタ・アトラスー都市の発展と成熟』研究会 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---------------------------|
| 1. 発表者名 林 憲吾 |
| 2. 発表標題 居住環境類型と行政区との関係 |
| 3. 学会等名 ジャカルタ研究会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 TAGUCHI Junko and HAYASHI Kengo |
| 2. 発表標題 Roundtable: Toward Future MOMO Education. |
| 3. 学会等名 The 16th International Docomomo Conference Tokyo Japan 2020+1 (国際学会) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 林 憲吾 |
| 2. 発表標題 アジア近代建築遺産データベースの40年：その展開・変容・課題 |
| 3. 学会等名 文化遺産国際協力コンソーシアム第29回研究会（招待講演） |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 HAYASHI, K. |
| 2. 発表標題 Kampung Satu Abad: Historical Informality of Urban Residence in Jakarta. |
| 3. 学会等名 The 3rd International Conference on Dwelling Form (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Hayashi, K. and Yutaka, M. |
| 2. 発表標題 Identification of Historical Kampung in Jakarta from the Perspective of Residential Form |
| 3. 学会等名 「インドネシアにおける経済センサス個票データの利用価値とその可能性」研究会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 林憲吾 |
| 2. 発表標題 ジャカルタ旧市街の都市再生 |
| 3. 学会等名 「成熟社会の文化遺産とは何か：多様性と持続可能性を作り出すために」（招待講演） |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Hayashi, K. and Yamashita, T. |
| 2. 発表標題 T. Kota on Desakota: Mechanism of Urbanization in Jakarta Metropolitan Region |
| 3. 学会等名 The Second Southeast Asian Mega City Workshop Series 2019（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Hayashi, K. |
| 2. 発表標題 Survey of "100 years old kampung" : case study in Rawa Belong. |
| 3. 学会等名 Seminar in Universitas Indonesia |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--------------------------------------|
| 1. 発表者名 林憲吾 |
| 2. 発表標題 ジャカルタ都市圏における百年カンポンの形成 |
| 3. 学会等名 日本建築学会都市史小委員会シンポジウム（招待講演） |
| 4. 発表年 2018年 |

〔図書〕 計2件

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 林憲吾（「来るべき都市」分担執筆）、饗庭伸編著 | 4. 発行年 2024年 |
| 2. 出版社 学芸出版社 | 5. 総ページ数 288 |
| 3. 書名 都市を学ぶ人のためのキーワード事典 これからを見通すテーマ24（「来るべき都市」担当） | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 林憲吾（第2章、第5章、おわりに分担執筆）、三村豊・新井健一郎・小泉佑介編著 | 4. 発行年 2024年 |
| 2. 出版社 北斗書房 | 5. 総ページ数 162 |
| 3. 書名 ジャカルタ・アトラス 地図でみる都市の成熟（第2章、第5章、おわりに分担執筆） | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

| | | | |
|---------|---------------------------|-----------------------|----|
| 6. 研究組織 | 氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号） | 所属研究機関・部局・職 （機関番号） | 備考 |
|---------|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| | |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|

| | | | | |
|--------|----------|--|--|--|
| インドネシア | インドネシア大学 | | | |
|--------|----------|--|--|--|